
夢、つなく想い

神内 恵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

夢、つなぐ想い

【Nコード】

N2725F

【作者名】

神内 恵

【あらすじ】

いつも仕事に追われる毎日。そんな毎日に橘直人は疲れきっていた。その疲れ故かたまに“落ちそう”になる。落ちるとは何なのか？落ちた先はどうなるのか？夢によって繋がるちよつと不思議な恋物語。

第一章：夢の始まり 1話

また今日も残業。

いつもいつも、なぜこんなにも仕事をしなくてならないんだろう。俺は何のために仕事をしているのだろう。

そんなことをぐだぐだ考えながら夜の路地を橋直人は歩いていった。

今から2年ほど前から、今務めている石橋司法書士事務所に司法書士として働いている。

入所してから残業続きで、こうやってマンションに帰ってきても、飼っている猫がエサをせがんでまとわりつかれるだけ。

部屋は書類まみれで、かろうじてベッドだけは綺麗にしてある。

仕事から帰ってくると出迎えてくれたり、食事を用意しておいてくれたりしてくれる奥さんや彼女もいない。

毎日仕事詰めで、なんてつまらない人生だろう……。

部屋に入るなりバッグをソファに放り投げ、猫に餌をやってスーツのままベッドに飛び込んだ。

「あー疲れた……」

体が重い。

目を閉じる。

意識がだんだん薄れていく。

ダメだ。まだ仕事が残ってるのに……。

何かに吸い寄せられるような感覚。

ダメだ。このままでは

“ 落ちる ”

「っ……っ」

体に力を入れ、どうにか起き上がる。

ベッドから降りて流し台へ行き、コップに水を注いで一気に喉に流し込む。

「またかよ。まだ仕事が残ってるのに睡魔なんか負けて眠るわけにはいかないんだよ」

でも、この睡魔は不思議な感覚だった。

どこかに引っ張られていくような。

落ちるような感覚。

いつもこうだ。

疲れた時は落ちそうになる。

いったいこれはは何なんだろう・・・

そう考えながらも、さっきソファに放り投げたバッグから書類を出し、パソコンを立ち上げて仕事を始めた。

今日の仕事は結局午前2時に終わった。

その後スーツを床に脱ぎすて、下に着ていたタンクトップと下着のままベッドに横になり、眠りについた。

第一章：夢の始まり 2話

次の日、俺はいつものように会社に行った。

俺の勤めている事務所は、小さいくせに仕事は多い。

みんなこんなに狭い部屋の中、デスクにしがみつき仕事に躍起になっている。

まあ今から俺もその一人になるんだけど。

デスクの列で一番右端の一番手前にある自分のデスクに着く。

自分のパソコンの電源を入れたとき隣から低い、なんだか嬉しそうな声がした。

「おい、橘。お前昨日の愛ちゃん見たか？」

ニヤニヤしながらそんなことを聞いてきたのは進藤裕介だ。

「見てませんよ。仕事でそんな暇なかったんで」

「おっ前どんなに愛ちゃんが可愛かったことか！」

進藤はいつもこうだ。

愛ちゃん。愛ちゃんとアイドルの話を持ちかけ、いかに愛ちゃんが可愛かったかを熱烈に話しててくる。

俺がさりげなく言った嫌味にも気付いていないようだ。
進藤はいつもその愛ちゃんをテレビやDVDでチェックして
いる。

そうやって自由気ままに過ごしているが、仕事は必ずきちんと済ま
せているもんだから、誰もこいつには何も言えない。

まあさすが先輩と言いたいところだが、進藤の場合はただ生まれつ
き要領がいいだけのようだ。

俺も、進藤のように要領がよけりゃこんなに残業することもなかつ
たのに。

仕事だけじゃない。

俺がもっと要領がよけりゃ、もっといろんなことが変わってた。

もっと要領良くやれていたら・・・

第一章：夢の始まり 3話

俺は本当は司法書士じゃなくて、弁護士を目指していた。

弁護士になろうと思ったのは高2の夏、親と喧嘩した時だった。

「おまえはもつと頑張ったらどうなんだ！」

「功太は、あなたみたくもともと勉強ができるような子じゃないけど、

毎日寝る間も惜しんで勉強してるのよ。それなのにあなたときたら
！」

当時俺はバイトに明け暮れていて、親にはそれが良くは見えなかったらしい。

「あんたらに何がわかんだよ！ あんたらがそんな風にグチグチ言うってくるから、バイトで家出るための金貯めてんだろ。」

俺が頑張つてないだあ？ 笑わせるな！ 何も知らねーくせに！」

それだけ言つて家を飛び出し、その日はネットカフェで一晩過ごした。

中学の時、俺は親の期待に答えようと頑張つて勉強していた。けれど、それはただ自分のやりたいことを我慢して、良い子ぶつて

自分を偽っていただけだった。

そんなことをずっと続けられるほど、俺は我慢強くはなかった。

俺の通っていた中学は有名私立中学で、本当はエスカレーターで高校に上がったのだが、俺は偏差値が高くも低くもない普通の無名の高校を受験し、そこを3年間通い続けた。

無名の高校を受験することを決めた時は、先生や親に反対され何度も説教されたが、俺はその説教の間いつも笑いを堪えるのに必死になっていた。

いつも偉そうに、落ち着いた素振りをしている奴等が、取り乱して大声を張り上げている様はあまりに滑稽だったからだ。

そのころは、高校に入ってしまったえばこっちのものだと思っていた。

高校に入学してからは、中学ではできなかった部活もして、学校行事にも熱心に取り組んで、友達ともたくさん遊んだ。

だが、そんな俺の中の充実した学校生活は一年も経たない中に終わりを迎えた。

秋になってから、俺の両親は夫婦喧嘩ばかりし始め、やがてその矛先は俺に回ってきた。

家に帰れば嫌味ばかり言われるようになり、最初は無視していたのだが、さすがに怒りを抑えられなくなって怒鳴ってしまうことも多くなった。

第一章：夢の始まり 4話

俺が怒鳴った後の、母親のため息や、悲しそうな顔を見るのが嫌だった。

でも怒鳴るしかなかった。

俺の意見を聞いてほしかった。

わかってほしかった。

怒鳴ったからもう懲りたかと思っても、また何日か経てば嫌味を言ってくる。

そんなことの繰り返しで、怒りで頭がおかしくなってしまうそうだった。

だから部活辞めて、バイトして、大学入学とともに家を出るための金を貯めていた。

でも勉強もちゃんとしていた。

バイトを始めても、いつも必ず学年ではトップだった。

そんなことも知らない両親は、昔の俺みたいに良い子ぶって、無理ばっかしている弟の功太のことまで持ち出して怒鳴り、俺もたまらなくなつて家を出るつもりだということを告げてしまった。

兄弟で比べられるのはあまりいいことじゃない。
ましてや、昔の俺自身のような奴をひき合いに出されるのは嫌だった。

大学入学とともに一人暮らしを始める奴はたくさんいる。でも俺の場合はそんなことじゃなくて、この家とはもう関わらないということだった。

その日、ネットカフェのソファに腰掛けながら俺は決めた。

親父が学生時代目指していた弁護士になって、あいつらを見返してやるつと。

見返してやるといったって、弁護士になってからあいつらに会いに行くことはないだろう。

ただ、弁護士になることによって、自分の中でなにか整理がつきそくな気がした。

弁護士になろうと思ったの理由は、ただそれだけだった。

第一章：夢の始まり 5話

だが、そこまで偏差値の高くない高校で上位を占めていたとしても、そんなに簡単に弁護士になれるわけがない。

司法試験に落ちた俺は、とりあえず司法書士試験を受け、司法書士の資格を取った。

司法書士として働きながら、弁護士の勉強をしようと思ったこの石橋司法書士事務所に入所した。

しかし、こんな毎日を送っているうちに、なんだかもうどうでもよくなってしまうた。という次第だ。

そんな昔のことを振り返りながら、進藤の熱弁に「へー」とか「そーなんですかー」とか、

適当に相槌を打ちながら仕事をしていると、俺のデスクに誰かが近づいて来るのが視界に入った。

コツコツとハイヒールの独特な音。

「進藤さん。アイドルの話ももうその辺にしておいたらどうですかあ？橘さん困ってるじゃないですかあ」

このぶりっ子気味な高い声は小林沙也だ。

「俺は別に困ってないよ」

本当はすごく困っている。

だが、別に進藤は悪い奴じゃないし、自分の好きなことや、意見をわかっもらいたいという気持もわかる。

だからなんとなく進藤の肩を持つことにした。

「そおだよ沙也ちゃん。コイツは仕事に打ち込みすぎて、詰まっちゃってるから、外の世界の話をしてあげてるんだよ。」

「外の世界って……」

アイドル1人の話が進藤の言う、外の世界のすべてなのかよ。

「まあ確かに橘さんは仕事詰めですよねえ。たまにはどこかに行つて、ストレス発散した方がいいですよお？」

「……そうだ！何でしたら今度私とお食事にも行きませんかあ？」

「でもやっぱ仕事大事だし。気持ちだけ貰っとくよ。ごめんね。」

「えーそんなあー。」

第一章：夢の始まり 7話

「良かった。落ちなかった・・・」

なんだか疲れた。

俺の額を汗が伝う。

「お前・・・大丈夫かよ？ 落ちなかったって、何のことだ？」

「別に、大丈夫ですよ」

汗を浮かべた顔で精一杯の作り笑いで答えた。

「仕事のしすぎで疲れてんじゃないのか？ お前確か、有休とってなかっただろ。」

それ使ってしばらく事務所休め。いっとくけど、これは先輩からの命令だ。いいな？」

「・・・はい。わかりました・・・」

進藤がこんな風に強くモノを言うことは少ない。

確かに、少し休みを取った方がいいのかもしれない。

そして俺は、今週の土曜から5日間の有休をとった。

土曜日。

有休をとったのはいいが、いざ休んでみると何をすれば良いのかわからない。

どうしよう。仕事がない。

何をしようか・・・？

そういえば、前から俺が好きだった作家がこの前新刊出してたっけ・・・。
それを読んで時間潰すか。

そう立ち上がった時、あることに気がついた。

「・・・部屋が汚い・・・」

寝る時間もさいてまで仕事をしていたため、全然気にしていなかったが、改めて部屋を見渡してみるとひどい。

「まずは部屋の掃除から始めるか」

いざ掃除を始めると、なかなかその手は止まらなかった。
最初は、机の上や床の上に散らばっているものを片づけるだけにし

ようと思っていたのだが、掃除機で床の埃をとり、掃除機で吸い取れなかった塵をクイックルワイパーで拭いとおまけに窓まで拭いた。部屋中に散らばっていた書類はダンボール2箱分くらいあった。それを必要なものと不要なものに分け、不要な物をシュレッダーで処分し、ようやく掃除が終わった。

9時から掃除をはじめ、4時間も掃除していたらしく、もう1時になっていた。

昼飯……。久々に自分で作るか。

いつもは、朝はパン。昼は事務所近くのうどん屋。夜は食べないか、インスタント食品だ。

昔はよく作っていたけれど、仕事詰めになってからは、自分で料理することはほとんどなくなった。

そういえば、何か作れるほど材料があるのだろうか。

冷蔵庫を開けてみると自分でも驚くほど何もなかった。あったのは、卵と牛乳とビールくらいだった。

「……まあどれも腐ってないだけましか」

第一章：夢の始まり 8話

棚の中からホットケーキミックスを発掘したので、とりあえずそれでホットケーキを作ることにした。

材料を混ぜ合わせ、フライパンにバターをひいて焼き始める。

その時足もとになにかが寄ってきた。

俺が飼っている猫、サイだ。

どうやらバターと生地焼ける香ばしい匂いにつられてやってきたらしい。

サイは、仕事帰りにいつも通っている路地に捨てられていた。

その日は雨が降っていて、バッグに雨がしみて書類が濡れるといけないから、俺は走って帰っていた。

そしたら、後ろから弱々しい猫の鳴き声がして、思わず俺は足を止め、その鳴き声の発信源を探した。

見つけるのにそれほど時間はかからなかった。その鳴いている猫は、電柱のとなりに置いてあるダンボールの中にいた。

雨に打たれ、弱りながらも精一杯鳴いていた。

俺に気付いた猫は、ふらふらしながら威嚇してきた。

俺は、動物はそれほど好きではない。

昔から一度も動物を飼ったことがない。

でも、そんな弱っている姿を見たら拾わずにはいられなかった。

その猫は、俺が手を伸ばして抱こうとすると、必死に威嚇して唸っていたのを止めずなりとその手を受け入れた。

猫が雨に濡れないよう抱きながら、ゆっくりと歩いて帰った。

俺の腕に体を預けて安心している猫の表情を見ると、なんだか嬉しくて仕方なかったのを今でも覚えている。

それからサイは俺の家族になった。

“サイ”という名はその日の晩飯が野菜炒めで、「野菜」の「菜」を取ってサイと名付けた。

最初は、野菜は英語でベジタブルだから「ベジータ」にしようと思っただけで、とあるアニメのキャラクター名とかぶるからやめた。

サイに餌をやっていると、なんだか少し焦げ臭い臭いがしてきた。

「やっべ、ホットケーキ焼いてたんだっ！」

慌ててホットケーキをひっくり返したが、もうすでに少し焦げてしまっていた。

両面を焼き終え、皿に盛り付ける。

メープルシロップもジャムも何もないので、バターをたっぷりつけて食べる。

少し焦げた所が苦かったが、まあまあ味わいだった。

とりあえず腹ごしらえを済ませた後、最初の目的であった俺の好きな作家の新刊を買いに行くことにした。

近所の本屋さんに入ると、店内の雰囲気は、以前来た時とあまりに違っていただけにビックリした。

「外の世界の話をしてあげてるんだよ」

ふと進藤の言ったことが頭に浮かんだ。

時代は動いている。

人も動いている。

何もかも、どんどん変わっていく。

第一章：夢の始まり 9話

俺は？俺は何か変わったただろうか？
何か成し遂げたものがあつたただろうか？

俺は、動いているようで止まっているのかもしれない。

毎日きちんと仕事をこなす。
そんなの、誰だってできる。

俺じゃなくたって、誰だって・・・

外の世界は俺が知らないうちに随分と変わってしまったてるんだらう。
いつも俺の出かける範囲は決まっていて、事務所とその近くのレス
トラン。通勤で通る駅。
そんな狭い範囲の中でちょこまか動き回ってたって、見えるものは
限られている。

なんとなく、いろんなものから置いてかれているようで、少し淋し
いような、悲しいような気持ちになった。

店内をぐるぐると歩き回り、どのジャンルの本がどこにあるのかを
一通り見て、目的の本を買った。
本屋を出て、そのまま帰ろうかと思つたが、今日の晩御飯や明日の
朝のことを考えて、スーパーによることにした。

野菜とリンゴ、アイスにプリン、スナック菓子、食パンにチーズ、インスタントラーメン・・・後は・・・

買い物カゴにボンボン食材を入れていく。

直感で必要だと思ったものを取りあえず詰め込んで、レジに行き支払いを済ませた。

レジ袋に食品を詰め込んでいると、ガラス越しに外の様子が見えた。

「雨・・・か・・・？」

空を黒い雲が覆っていた。

傘を差して歩いている人や、雨に濡れながらも傘がないため走っている人達が見えた。

耳をすませてみるとザァツ・・・という雨の音が聞こえてくる。

第一章：夢の始まり 10話

・・・さて、どうしようか・・・。

レジ袋に食品を詰め終わり、両手にレジ袋を持ってため息をつく。

傘はない。ってことは雨に濡れながら帰るしかない。

・・・この荷物を持って・・・。

本屋で買った本と財布と携帯をレジ袋に入れ、スーパーの出口へ向かう。

自動ドアが開き、雨中を走りだす。

雨は俺が思っていたよりも強く、雨が服にしみこんで重い。

走るのなんて久しぶりだ。

なんとなく、気持ちがいい。

体中びしょ濡れになって一生懸命走っている。

何も考えず、ただ走る。

それだけなのに、なぜかとても気持ちいい。

・・・が、もう限界。

この荷物じゃさすがにきつい。

それに、もうすでにこんなに濡れてしまったら、走るのなんてどうでもよくなってくる。

俺は走るのをやめて、歩くことにした。

しばらく歩いていると、サイの餌がもうすぐで無くなりそうなのを思い出し、

ちよつと寄り道してキャットフードを大きいのを一袋買って、それを抱えて帰った。

部屋に入るなり、シャワーに直行。

以外に体は冷えていて、シャワーがとても気持ち良かった。

晩御飯は焼うどんを作り、しばらくテレビを見た。

時計を見ると9時を回っていた。

「もう寝るか」

久々に今日重い荷物を抱えて走ったせいだが、体は結構応えていた。電気を消して、ベッドに入る。

目を閉じる。

体が重い。

来た。落ちる。どうしよう。

落ちたらどうなるんだろう。

やっぱ、夢を見るんだろうか。

どうせ明日も休みだし。

いいや。このままで……

そうして俺はとうとう、落ちた。

第二章：夢の中 1話

「ん……」

目を開くと目の前は真っ白になっていた。
起き上がってみて辺りを見回しても何もなただただ真っ白な世界。

自分の体を見てみると、服はジャージのズボンに灰色のトレーナー。
寝る前に着ていたパジャマだ。

ここは、夢の中だろうか？

今まで何回もいろんな夢を見てきたけれど、こんな本当に何も無い
真っ白な所なんて、出てきたことはない。

いつも必ずどこか、学校だとか自分の部屋だとか、あと知らない場
所も出てきたことはあるけど、どれも必ず“場所”だった。

こんな空間のような所に来たのは、夢でも現実でも初めてだ。

ここに突っ立っていたってしょうがない。

そう思い、取りあえず前へ前へと歩き出した。

前へ歩く。と言ったって、こんな何もない所じゃ自分が本当に前へ
進めているのかさえ分からない。

どれくらい歩いただろう。

いったい、どこまでこの空間は続いているのだろう。

どこまでも続く何も無い世界。

俺はただただ歩き続けた。

すると、右の方から小さなピンクの何かがヒラヒラと飛んで来た。

「桜……の花びら？」

右を見てみると、大きな桜の木とその横にベンチがあった。
ベンチにはだれかが座っている。

髪の毛の長い……女性。

でも、さっきまでこんな無かった……と思う。

いつの間に……？

それは本当に気付けばあった。という感じだった。

今の季節は冬。

しかしその桜の木は満開で、桜の花びらがたくさん舞っていた。

第二章：夢の中 2話

辺りを見回すが、やはり真っ白な空間が広がっている。

何もない世界にポツンとあるそのベンチと大きな桜の木は、とても違和感があった。

真っ白の画用紙に黒いインクのシミがポツンとあるような、そんな違和感。

ベンチに近寄ってみると、ベンチに座っている女性は目を瞑っていた。

寝ているんだろうか？

彼女も俺と同じようにパジャマを着ている。

27

近づいてみて気付いたけれど、このベンチはちょっと変わっていてひじ掛けのところが広く、少し小さい机みたいになっていた。

このベンチ・・・知ってる。

どこのベンチだったっけ・・・？

「・・・」

「・・・そうだ！久米公園だ！」

「へ！？」

「え!？」

ベンチに座っていた女性が、なんとも間抜けな声をあげて勢いよく立ちあがったので、俺もびっくりしてしまった。

「あ、すみません。寝ていたところを邪魔しちゃって」

「え、い、いえ、別に寝ていたわけじゃないんです。ただ、目を瞑っているいる考え事してて、その、まさか誰か来るなんて思ってもみなかったんで・・・その・・・」

そう言いながら彼女は、ブンブン手を横に振ってどんどん頬を赤らめていく。

「あ・・・あの？」

その姿があまりに可愛くて、おかしくて笑い出しそうになるのを堪えていたのだが、顔と肩が我慢できずに笑ってしまった。

「ごめん。なんかおかしくて。」

そう言いながらまだ肩が笑っている。

「え……」

「それよりさ、ここって夢の中なの？」

今まで見てきた夢の中で、こんな質問をしたのはこれが初めてだ。

「多分、そうだと思いますけど……」

彼女も俺と同じようにここへ来たのだろうか。

第二章：夢の中 3話

「さっき、久米公園って言ってましたよね」

「え、うん。このベンチがさ、久米公園のベンチだったような気がする」

「そうですね！ このベンチってやっぱ久米公園のですね！ 私、久米公園の近くのアパートに住んで、よく本を読むのに久米公園のこのベンチを使っんです」

彼女の顔がパツと明るくなった。

その時気付いたのだが、彼女は化粧をしていなかった。
多分歳は俺より2つ3つ下。

最近をよく、化粧を落としたら眉がない子とかもいるけれど、彼女はそんなことはなくスツピンでもきれいだった。

「俺もこのベンチでよく本読んでたよ。この小さい机に、手軽につまめるもんと飲み物置いてさ」

「このベンチの形って不思議ですね。久米公園にもこれ一つしかないし」

久米公園はなかなか大きな公園で、ベンチはたくさんあるにはるのだが、なぜかこの形のベンチはこれ一つしかない。

俺が大学生だった頃、大学の近くのアパートを借りていて、その近くにあったのが久米公園だった。

勉強で行き詰った時とかによく、このベンチでたくさん本を読んだ。夏の日差しの強いときでも、この大きな桜の木が庇ってくれる。とても居心地のいいおれのベストプレイスだった。

まあ国家試験に落ちてから行かなくなっただけだ。

「あの、本はよく読まれるんですか？」

「昔は結構読んでたんだけど、最近は時間がなくて全然。でも今は有休取ってるから、

ここ五日間はいろいろ読んでみたいなとは思ってる」と

「そうなんですか。私は小さい頃から本を読むのが好きで、だから図書館司書になるのが夢なんです」

「なれるといいね。図書館司書」

「はい。でも、資格が取れても採用とか厳しいみたいで、ちょっと自信ないんですけどね」

苦笑しながら彼女はそう言った。

第二章：夢の中 4話

彼女は俺と違って純粹に夢を抱いていて、それを叶えようと頑張っている。

また、それゆえの不安も抱えている。

俺は、俺は弁護士になりたかった。でもそれは“夢”と呼べるほどきれいなものじゃない。

両親を見返すために。

俺と一緒に弁護士を目指して勉強していた奴等は皆、もっと純粹に弁護士を目指していた。

弁護士になって何をしたいかハッキリしていて、照れくさそうに、でも自信たっぷり話していた。

初めから、そんな奴等と同じ道を歩めるはずがなかったんだ。

もし、国家試験をパスして研修受けて弁護士になったところで、その先はどうするんだ？って話だ。

弁護士になってどうなりたいのか、何にも考えてなかった。

ただ両親を見返したかっただけの俺。

俺も、期待と不安を抱えながらも夢を追ってみたかった。

あんな風に目を輝かせて夢を語ってみたかった。

「俺・・・はさ、弁護士になりたかったんだ」

なんとなく、彼女ならわかってくれると思った。

きつと全部聞いてくれる。

笑わないで聞いてくれる。

・・・全部、わかってくれる。

俺の中に抱えていた全部を。

親にさえ言えなかった気持ちを。

誰にも言えなかったこんな馬鹿な俺の話を。

まだ会ったばかりなのに、そんな確信が俺の中にはあった。

正直、自分でも驚いた。今まで誰にも言わなかったし、言いたくとも思わなかったことなのに。

今、ペラペラと全部話してしまっているんだから。

もしかしたら、ここが夢の中だったからなのかもしれない。

現実じゃない世界だからこそ。

夢の中では、この重荷を下ろしてしまいたかったのかも知れない。

ずっと一人で抱えてきた、この重荷を。

第二章：夢の中 5話

彼女はちゃんと最後まで聞いてくれた。

笑わないで、黙って。

「悲しいですね」

全部聞き終わってから、彼女は穏やかな顔でそう言った。

「悲しかったのかな。自分でもよくわからないんだ。多分、悲しさよりも苛立ちの方が強かったと思う。だから、一度も泣かなかった」

「泣かなかったんじゃない。泣けなかったんですよ」

「泣けなかった？」

「泣いてしまったら、負けちゃいそうだったから。全部全部わからなくなっちゃいそうだから。自分が悪いんじゃないかって、自分を殺して、昔の自分に戻ってしまいそうで」

俺は目を見開いた。

下手したらこの子は俺よりも俺のことをわかってるんじゃないのか？

本当に、彼女の言っている通りだ。

いつもテストの度にビクビクして。

毎日の生活もいい子でいなくちゃって張り詰めて。

自分の意見なんか言えずに、苦しんでた自分。

そんな頃に戻るのはごめんだった。

だから自分は正しいんだって、そう思いたかった。

そのためには、誰かのせいにするしかなくて、それで両親を憎むことにした。

「子供、だっ たんですよ」

「まあ確かに、ガキだったのかもな」

それは、今も。

「会いに行ってみたらどうですか？」

「会いにつて、あの人達に？」

「ええ、そうです」

「無理だよそんなの。ほとんど勘当状態で家出てきたし、向こうも帰ってきてほしいなんて望んでない。」

それに、会ったってまた喧嘩するだけさ」

「そんなことないですよ。少なくとも、向こうは会いたいと思っているはずですよ。」

きつと、いや絶対。今のあなたなら大丈夫ですよ」

なんでそんなことがいえるのだろうか？

あの人達が、俺に会いたい？

そんなことあるわけがない。

「別に今すぐとは言いませんが、気持ちの整理がついたら会いに行つてあげて下さい。」

それは多分、あなたのためにもなると思います」

第一章：夢の始まり 6話

「じゃあ僕と食事行かない？今度にでもさっ」

と言いながら、進藤が俺のデスクの上に身を乗り出して来る。

進藤は小林沙也が入所してきた頃から沙也のことを気に入っていた。確かに顔は目が大きくて可愛いが、このぶりっ子具合がどうも俺は苦手だ。

「進藤さん、アイドルの話ばかりするから嫌ですう」

「愛ちゃんの話は橘にしかしないよ？だからさ、行こうよ沙也ちゃん」

・・・なんで俺だけにするんだよ。

「それでもダメです！ あ、もう行かなくちゃ・・・じゃあ橘さん、仕事空いたら誘ってくださいね」

そう言って彼女は小走りで行って行った。

「沙也ちゃん可愛いよなあ」

「・・・そうですか？」

「そおだろ。なあ俺そんなに愛ちゃんの話ばかりしてるか？」

「してますよ。充分」

あんなに毎日熱弁してるくせに、自覚ないのかこの人は。

「そうか・・・。それより橘、仕事空いても沙也ちゃん誘うなよ」

「誘いませんよ。俺、小林さんに興味ないですし」

「本当か？ 絶対だぞ。橘君っ」

そう言いながら、俺の背中をバシバシ叩いてくる。

「はいはい。絶対ですから、背中叩かないで下さいよ」

「ああ、すまん。すまん」

それっきり進藤もようやく仕事をし始め、何も話すことなく黙々と仕事に励んだ。

そして12時30分。俺は仮眠を取ろうと、休憩室に行った。

仕事中も寝不足のせいか、頭が痛くて仕方がなかった。
休憩室のソファに横になった。

体が重い。

目を閉じる。

意識がだんだん薄れていく。

ああ・・・ヤバイ。

また来たか・・・。

体を動かそうとするが、動かない。

声を出そうとするが、出ない。

このままじゃ、
“落ちる”

ガチャッ

ドアの開く音。

「おっ橘か」

この声は・・・進藤？

「おい。お前どうした？ 大丈夫か？」

その声は俺の顔の前まで来た。

なんでこんなところで。ここは俺の職場なのに。

そうだ、仕事がある。何が何でも起きないと・・・

そう思い、体に精一杯力を込める。

「・・・っ！」

目が開き、体も動く。

第二章：夢の中 6話

「俺のためにも・・・？」

「ええ、会わなかったらあなた絶対一生後悔する」

「でもやっぱ俺はあの人達には会えない」

後悔なんて今までたくさんしてきた。

あの時こうしていればとか、こう言っていればとか、いつもそんなことばかり考えて、

何も変わるはずなのに後ろばっか見てた。

これからもたくさん後悔するのは目に見えてるし、

このままあの人達に会わずにこの子が言うように後悔したって、別にそれでいい。

別に今の状況を変えたいとは思わない。

今さら普通の家族みたいになれたとしても、それからどう親に接すればいいのかもわからない。

だから別にもうどうでもいいんだ。

俺はそう言ったつきり黙りこくってしまって、彼女も何も言わずにただ何処かを見つめていた。
俺たちはずっとベンチに並んで座っていて、ただ桜だけが騒がしく舞っていた。

彼女はなんだか悲しそうな目をしていた。

俺のことなのに。他人ことなのに。

なんで彼女が悲しそうにするんだ。

いつもの俺だったら何か適当に言って、作り笑いをして、このなんとも言えない重い雰囲気を少しは明るく変えていたと思う。

でもそんな気分にもなれなかった。

誤魔化しの笑顔なんて彼女には通じない。
そう思ったからだ。

だから俺は何も言えずにただ黙っていて、
彼女が話しかけなければ多分ずっとこの重い雰囲気のままだったと思う。

「・・・あの、さっき有休の間に本を読むつもりだって言ってたよね？」

「え？ あ、うん。そうだけど」

「何の本読むか決めてるんですか？」

「いや、別にきめてないけど。一応本屋行って一冊買ったけど、でもそれも一日で読み終わるだろうし」

「好きなジャンルとかありますか？」

いきなり何なんだろう。

「ミステリーとかかな。でも感動するのとかも読みたいかも」

「じゃあ、こんなのとかどうですか？」

そう言っただけで彼女はいくつかの本のタイトルと著者の名前を挙げた。

どれも僕が全然知らないものばかりだった。

第二章：夢の中 7話

彼女はとても楽しそうに本のことを話した。

きつと本当に本が好きなんだろう。

そんな彼女の楽しそうな顔を見るのは好きだった。

俺たちは長い間話し続けた。

どのくらい話したかわからないくらい話した。全然疲れなかったし、退屈にもならなかった。

こんな楽しい時間を過ごしたのは久しぶりだ。

この時間がずっと続けばいいのに・・・

そう願っていたのだが、そういうわけにはいかなかった。

彼女はいつの間にか消えていた。

俺が瞬きをして、目を開けた時には跡形もなく消えていた。

まるで、最初から存在しなかったみたい。

でも別に寂しくなかった。

かと言って、悲しかったわけでもない。

だって、きつとまた会えるから。

そつだ、今度は何の話をしよう？
彼女は本の他に何が好きなんだろう？

まるで子供みたいに、そんなことを考えるのが楽しかった。

しばらくして、俺もその世界から姿を消した。

いつもと同じ目覚め。

目覚まし時計を見る。今の時刻は・・・9時か。
ちよつと寝すぎた。

ニヤーニヤー

いつの間にかサイが俺のお腹の上に乗っている。

「ああ、餌か。ちよつと待ってな」

サイを床に下ろし、ベッドから出て伸びをする。

いつもと同じ目覚め、さつきそつ言っただけどそれは撤回。いつもより何倍も、すがすがしい目覚めだ。

「さ、朝飯だ」

サイと俺の朝飯を終え、昨日買った本を読みはじめた。

やっぱり、本は良い。

自分のことを考えなくていい。

将来の不安を抱かなくていい。

本の世界はここじゃない。

俺の見ている世界じゃない。

彼女の見る世界はどんな感じなんだろう？

第二章：夢の中 8話

そんなことを時々考えながらもどんどん読み進めていった。

ちよつどその本を読み終えた頃、時刻は2時を過ぎていた。

昼飯、食ってない。

サイを見るとちよつど昼寝中だった。

昼飯はチャーハン。ちよつど出来上がったところにサイも起きてきた。サイに餌をやつて、チャーハンを口に運びながらこれからどうするか考える。

特にどこか行きたい所もないし。

テレビもまだワイドショーとかしかやつてない。

知り合いもみんな仕事だろうし……。

DVDでも借り行くか。

全部きれいに食べ終えてから、着替えてレンタルショップへ出かけた。

前から気になってたのと、今人気のと、アクションものの全部で3本、3泊4日で借りた。

レンタルショップを出て、そのまま帰るつもりだった俺の脚は、とある場所へ向かっていた。

この町にある少し小さな町立図書館。

話している時に彼女が言っていた本が気になったのだ。

俺の知らない本のタイトルだったから、あんまり覚えてないけど、一応探してみたくなった。

図書館に入ると図書館ならではの匂いが漂ってきた。

図書館なんて久しぶりだ。

学生の時以来ずっと使ってない。

というか、ここの図書館に来たのは初めてだ。

まずはカウンターに行ってカードを発行してもらった。

そのついでに、その図書館員の人に俺の覚えている彼女が言っていた本がどこにあるのかを聞いた。

どうやら結構人気の作品らしくて、その図書館員の人はずぐに案内してくれた。

しかも、その本と同じジャンルのお勧めの本も教えてくれた。

夢の中の彼女も、こんな風になるのかな。

ごく自然に、そんなことを思った。

一応勧めてくれた本も入れて3冊借りて帰った。

帰り際、ある疑問を抱いた。

・・・彼女はこの世界に存在するのだろうか？

彼女は夢の中にでてきた人であって、本当は存在していない可能性もある。

こんな根本的なこと、何で気がつかなかったんだろっ。

第二章：夢の中 9話

でも彼女は俺の知らない本のタイトルまで言ったわけだし・・・
どうなんだろう？

部屋についてからもそのことをずっと考えていた。

「夢には不思議な力がある」って、テレビでなんかの偉い人が言っていたのを見たことがある。
ワールドトレードセンターの同時多発テロの事だって、それが起こる前にその映像を夢で見たって言う人がいっぱいいたらしいし。
それに寝る前に思い浮かべたことが夢になるとか、会いたいと思っ
ている人が夢に出てくるって言うのも聞いたことがある。

わけがわからない。

今まで別に夢のことを疑問に思わなかったけど、考えてみれば謎だらけだ。

だいたい、“夢”って何なんだ。

赤ちゃんの時は夢でいろんなことを学習しているらしいけど、大人になっても夢なんて普通に見る。

第一全然学習とはかけ離れている夢を見るのがほとんどだ。

どうして人は夢を見るのだろうか。

神様は何故、人に夢を見る機能を付けたんだろう。

同時多発テロの時みたいに、何かを伝えるためなんだろうか。

わからない。

考えるのもうやめよう。

せつかくの有休なんだから。

彼女が存在しなくても、会えればそれでいいかもしれない。

今日は、会えるだろうか。

電気を消して、布団にもぐりこむ。

目覚まし時計はセットしない。

できるだけ向こうにいたい。

ゆっくりと目を閉じ、体が沈むのを感じる。

そして、俺は再び落ちた。

目を開けると、そこに広がるのは真っ白な世界。
また、どこかへ向かってただ真っ直ぐ歩く。

気付けばまたそのベンチはあった。

彼女はいない。

まだ来ていないのか。

それとも、今日は来ないのか。

ベンチに腰掛け、目を閉じる。彼女がそうしていたように、俺もそうして彼女を待った。

この前は気付かなかったけど、少し風が吹いている。
気持ちがいいくらいのとても弱い風。

なんとなく、心が落ち着くのがわかる。

「くんばんは」

昨日ひたすら話し続けたので、もう聞き慣れてしまった声。
目を開けてみると、やっぱり彼女が立っていた。

「くんばんは」

「隣、いいですか？」

「ぶじぞ」

彼女が静かに隣に座る。

第二章：夢の中 10話

「なんか、ここって本当に何もありませんよね」

「確かに、風とベンチと桜の木しかないね」

「でもなんか満ち足りてる。空も鳥も虫もないのに。ここはこのままで十分って感じ」

「なんとなくわかる気がする。いろんなものがこつた返してなくて、すっきりして何も考えなくていい。何もないのが一番楽で一番良い」

「いいかげんくらいが丁度いいですね」

「俺ももっといいかげんにやってればもっと生きやすかったのかも」

「え？」

「頭ではわかってるんだけど、何故か完璧にしなくちゃって思っちゃうんだ。完璧にできるはずなのに、無理して頑張って自分追い詰めて、で結局ものすごく疲れる」

いつもそう。

他人の目を気にしてか、昔親が「完璧に」って言いつけてたのが体に染み込んでいるのか。

今となつては原因もわからない。

いつも完璧にしようとして、全然余裕なくて。

誰が悪いとか誰かのせいとかじゃなくて、結局は自分がダメなんだ。

それを親のせいにしてたのかもしれない。

本当、ガキだ。

「私もありましたよ。そういうの」

「本当に？」

「はい。姉が小さい頃から何でもできるタイプの人で、親のそんな姉が誇りで、それがとても羨ましかった。一時期勉強とか頑張ってみたけど、全然ダメで。なんか自分が惨めに思えて、辛かったです」

「あ、でもあの時頑張ってみて良かったなって思いますよ。自分の限界とか足らなさとか知れましたし。あと、姉は泳げなかったんですよ」

「泳げなかった？」

だから何なんだろう。

「はい。だからプールの授業の時も毎回見学してたんですよ。それに料理も全然できなくて」

「……それで？」

「やっぱり、人には向き不向きがあるんだなって。足りないところはどこか別のところに蓄積されてて、逆に人より秀でてるものはどこかでその分欠けてるんですよ。自分では、人より良いところって見えにくいですけどね」

自分の人より秀でてるところなんて、ない。

欠けてる所ならすぐ見つかるのに。

「俺にも、人よりいいところなんてあるのかな」

「ありますよ。もちろん」

「……例えば？」

普通、自分の良い所を人に聞くなんて気が引けるけど、でもものすごく気になる。

第二章：夢の中 11話

「今は、言いません」

「なんで？」

「何ででもです！」

彼女は意外に頑固なところがあるらしく、結局言ってくれなかった。

「でも、みんながみんないい加減だったら困りますけどね」

「確かに。真面目にしなきゃいけない時は真面目にしないとね。でもそうになると息抜きとかがって難しいんだよね。そんなに要領よくないし」

「そういう人には、誰か一人でもその人のことをわかってあげられる人がいればいいんですけど。もしくは、気を張らなくていい場所とか、好きなこととか」

「それなら、俺はもう見つかった」

「・・・私もです」

「・・・そっか」

それから昨日のようにずっと長い間いろんなことを話した。

今まで一番恥ずかしかったこととか、読んだ本のこと、バイトでの失敗やサイのことも話した。

次の日も、その次の日もたくさん話した。

そして彼女と会ってから5日目、つまり有休最後の日。

彼女と話しながら仕事のことを考えた。

残業続きだった毎日に戻る。

それじゃ、何も変わらない。

「いいかげんくらいが丁度いいですね」

いいかげん・・・

彼女が言っていた通りにしてみるのもいいかもしれない。
さすがに仕事で“いいかげん”にすることはできないけど。

次の日、久々の出勤。

事務所へ行く足も、いつもとは違って少し軽かった。

でも、少し不安だ。

今まで何も文句も言わず、与えられた仕事をキッチリやってきたから、いきなりどうした？って思われるだろうな・・・。

だいたい、許してくれるのかもわからない。

でも、何かしないと何も変わらない。

自分自身も、周りも。

第二章：夢の中 12話

事務所に着くと、いつもと変わらずみんなせかせかと働いていた。

俺に気付いて話しかけてくれた人達と軽く挨拶してから、自分のデスクへつく。

「お、橘。どうだ、ゆっくり休めたか？」

「はい、進藤さんのおかげで」

「そうか、なら良かったな。どうせならもつと有給取っとけばよかったんじゃないか？」

「でもみんなに迷惑かけちゃいますし」

「まあそれもそうだな」

そう言つて進藤は仕事に戻った。

デスクに荷物を置き、所長のところへと向かう。

エレベーターを使わずに階段で上の階へ上がった。

所長室は上の階の会議室の奥にある。

会議室横の廊下を通りつて所長室のドアの前に立ち、ドアを叩く。

「はい」

低いしつかりとした声がする。

石橋所長は正直言つて、よくわからない人だ。

普段は人の良い温厚な普通のおじさんなのだが、俺達一人ひとりの仕事量を正確に把握していて、どんどん仕事を増やしてくる。

「失礼します」

ドアノブを回して中へ入る。

「橘君か、めずらしいしいな。有休はどうだった？」

「はい、とても良かったです。あのそれで、お願いしたいことがあります。」「

「へえー何だね？」

「率直に言いますと、僕の仕事の量を減らしてほしいんです！」

勢いよく頭を下げる。

「どうしても今の量じゃ無理なのかね」

「はい」

「でも今までちゃんとやれてたじゃないか」

顔をあげる。石橋所長は少し不機嫌そうな顔をしている。

「ヤバイ、怒らせたかな。」

「それは、何と言いますか、その、無理をしていたんです」

「無理ねえ・・・」

「はい」

「よし、いいよ。具体的にはどれくらい減らしてほしいんだね？」

「は？・・・あ、いやはい、そうですね・・・」

一通り話し終え、署長室を出た。

第二章：夢の中 13話

「はぁー・・・」

思わずため息が出る。

まさかこんなに簡単に事が進むとか思わなかった。
これだから所長はよくわからないんだ。

でも、良かった。

これであと一人。

ホッと胸をなでおろし、デスクへと戻る。

今度もエレベーターは使わず階段で下へ降りることにした。

あと3段程度で階段を下り終わるといふ所で、またあのぶりっ子な
声が出た。

「橘さん！ 有休終わっただんですね！」

「まあ、うん」

「何処に行きましたか？」

「いいや、特に」

「えーせつかくの休みなのに？ 退屈じゃなかったですかあ？」

「全然退屈じゃなかったよ。むしろ久しぶりにいっぱい笑ったような気がする」

あんなに長い間たくさん話して、あんなに笑ったのは本当に久しぶりだった。

「誰かと一緒だったんですか？」

「んー、まあね」

「それって、男の人ですか？ 女の人ですか？」

「女の人」

「え・・・！？ でも前に彼女いないって言ってたじゃないですかあ！？」

「別に彼女じゃないよ」

「じゃあ何なんですか！？」

「あーごめん！ 俺、もう行かないと。じゃー！」

無理やり会話を終わらせ、そそくさと自分のデスクへ逃げる。

これだからああいう子は苦手なんだ。
関係ないのにあれこれ次から次へと聞いてくる。

友達と一緒にだったって言うときゃ良かった・・・。

まあいいや、別に。

ちょうどデスクに着こうとした時だった。

「橘！ 悪いけどこれ頼める？」

来た。声でわかる。平沢さんだ。

声のした方を向くと、思ったとおり平沢さんだった。

俺に向かって伸ばしている手には、おそらく仕事のだろうファイルが握られていた。

俺がこの事務所に入ってきたばかりの頃から、細かい仕事を押し付けてくる。

でも結構長くここで働いている人だし、なかなか事務所で権力があるからいつも断れずに仕事を引き受けている。

「あの！ 俺も今の仕事でいつも手一杯なので引き受けられません。すみませんが他を当たって下さいませんか？」

迷惑だということが伝わるよう、少し強めに言った。

「な！・・・そうか、わかった」

平沢さんはファイルを強く握りながら、それだけ言って去っていった。

第二章：夢の中 14話

仕事は、今日明日までは前と同じ量ということになっている。

でも、いつもより苦痛に感じない。

それは多分、少しだけれど何かが変わるからだろう。

思いの外、仕事のペースがいつもより速い。

仕事に集中できる。

「おい橘、もうそろそろ行かないか」

時間も気にせず、仕事に没頭していた。

だから進藤にそう言われても、一瞬何の事だか分らなかつた。

「え？」

「昼飯、行くって言っただろ？」

事務所の壁に掛かっている時計を見ると、今の時刻は12時40分だつた。

もうすぐ1時か、そう思うと急に少しお腹が減ってきた。

「すぐそのうどん屋でいいだろ」

「勝手に決めないで下さいよ」

「もう決まったことだ。ほら、行くぞ」

進藤はそう言ってさっさと行ってしまった。
その後を急いで追う。

俺がこの事務所に入ったばかりの頃も、進藤と食事を何度かした事がある。その時もそのうどん屋だった。

でもここ一年くらいは一緒に食事なんてしていない。

そのうどん屋も久しぶりだった。

そのうどん屋は、事務所を出た通りのつきあたりを曲がってすぐの所にある。

こじんまりとしていて、でもだからこそなんだか落ち着く、そんなうどん屋。

うどん屋の中に入ると、なんだかむっとした暖かい空気が漂ってきた。

中を見渡すと、客は5人位しかいなかった。

「一番奥行くか」

進藤が一番奥のテーブルを指さして聞いてくる。

「別にいいですよ、どこでも」

一番奥のテーブルに着く。

「おばちゃん、丸天一つと・・・」

進藤が眼でお前は？と聞いてくる。

「俺はきつねで」

「はいはい」

メニューは見なくてもいい。

前から、なぜかここではいつも進藤は丸天うどん、俺はきつねうどんと決まっていた。

何があったからとか、理由があるわけではない。

ただ、なんとなく。いつの間にかそう決まっていた。

第二章：夢の中 15話

懐かしみながら店内をじっくり見回してから、進藤の方を見ると、進藤は片肘をついてまっすぐ俺を見ていた。何か考えているような、真剣な表情。

進藤にそんな風に見られるのは、少し気持ち悪い。

「な、何すか」

「・・・」

何かある。

72

「こつやって食事誘ったのも、何か話があるからなんですよね？」

そう問い詰めると、進藤はため息を一度ついてから腕を組んだ。表情はさっきまでとは逆で、なんだかニヤニヤしている。

「お前にさ、あること教えてやる」

「あること？」

「なんかお前、可哀そうだからな」

は？可哀そう？

「どういう意味ですか・・・？」

「そのままの意味だ。でもま、もう違うのか」

「違っつて何がですか？」

「可哀そうじゃなくなっただってこと」

「はい、お待ちどお様」

ちょうどその時、頼んでいたうどんが来た。
湯気が辺りに立ち上る。

「さ、食うか」

進藤がパキツと割り箸を割ってから、うどんをおいしそうにすすった。
食べるよりも話の続きをしたかったのだが、仕方がないから俺もうどんを食べ始めた。

何の会話もなく、二人して黙々とうどんを食べていた。

「可哀そうじゃなくなった」と進藤は言っていた。
平沢さんの仕事を断ったからだろうか？

それにしても、進藤は今まで俺を可哀そうだと思っていたのか。

そんなことを考えながら食べていると、うどんはもう後わずかにな
っていた。

進藤の方も、もう後はつゆだけになっていた。

「お前さ、事務所来てすぐ所長の所に行つたる」

「なんで知ってるんですか？」

「まあ、なんとなくな。で、何話に行つたんだ？」

「……仕事の量を減らしてもらいに」

「やっぱりそうか」

やっぱり？

「所長、あっさりOKしてくれたろ」

「……はい」

どうしてそんなことがわかるんだ？

第二章：夢の中 16話

その疑問はどうやら顔に出てたらしい。

「なんでわかるのかってか。簡単なことさ、みんなそうだったからだよ。みんな同じように所長の所に頼みに行った。そしたらあっさりOKだった。今日のお前みたいにな」

「みんなですか？」

「あー、正確に言うとみんなではない。だが、今はまだ所長の所に行っていない奴も、いずれは必ず行くことになる」

進藤はコップの水を一気に飲みほしてから、話を続けた。

「石橋所長が一人ひとりの仕事を全部チェックしてるのは知ってるだろ。あれはな、一人ひとりの仕事量がちゃんと足りてるのかわ見てるんだよ。それで、まだこいつならやれそうだと思ったら仕事を増やすってわけ」

「でも、何のために？」

「一人ひとりが、できるだけ多く仕事をこなした方が、事務所にとつては良いに決まってるだろう。そいつがこれ以上仕事増やすのは無理なら、いずれそいつ自身が言ってくるだろ。まあ、お前の場合は頑張りすぎてたけどな」

「なるほど・・・」

「ちゃんと仕事こなした分給料もらえるしな。だからみんな文句も言わずにせかせか働いてる」

だからか、可哀そうってのは。

さつさと所長に言ってしまえばいいものを、無理して頑張っ、何も知らない可哀そうな奴。

「はあ・・・」

自然とため息が出る。

本当に早く所長の所に行つときゃ良かった。

でもま、ちゃんとその分もらってるみたいだからいいか。

「それと、平沢さんいるだろ」

まだ何かあるのか。

それは口には出さずにだた頷く。

「あの人はいつつも仕事押し付けてくるだろ。あれはな、石橋所長に頼まれてるんだよ。まだ仕事に余裕がありそうな奴には仕事を増やせて」

「俺、全然余裕ないのに頼まれてたんですけど」

「それは平沢さんの目がダメだったんだろ。お前は、人前では普通にしてるみたいだからな」

「・・・どういう意味ですか？」

「きついならきついって言わないと、損するってことだ。あと、人の目ばっか気にするのもやめた方がいい」

そう言っただけで進藤は席を立って、会計を済ませに行った。

あの人は、どこまでわかった上で言っているのだろうか？
いつからそういう風に思っていたんだろう？

いろんな疑問が浮かぶ。

なんだか変な気分だ。

胸がざわついている。

第二章：夢の中 17話

見透かされていたのだろうか？

全部。

誰だって人の目を気にする。

他の人以上に、敏感に気にしていると自分でも思う。でも、それすら気付かれないようにしてきたつもりだ。誰にも責められることのないように。

しかしそれが、進藤の目にはどう映ったのだろうか？

「おい、行くぞ」

進藤が会計を済ませ、事務所へ戻ろうとしていた。慌ててその後を追う。

「俺の分、払います」

さっき進藤は二人分払っていた。その分を返そうと、急いで財布を取り出す。

「いい、今日は奢る」

「いいんですか？」

「なんだよ。そんな、意外そうな顔して」

「いえ・・・」

事務所までの帰り道、それ以外は何も喋らなかった。

さつき浮かんだ疑問を、全部聞いてみようかとも思った。

何度も喉元まで上っては来るが、それは声にはならず、また心の中へと戻っていく。

それは事務所に戻ってからも続いた。

進藤も、そのことは何も話さなかった。

いつもの例のアイドルの話さえしなかった。

だからというわけでもないが、仕事には集中できた。

そうしているうちに時間は流れ、気がつけばもう9時だった。

もう、帰ろう。

いつもならまだ仕事を続けるが、何だか今日は早く帰りたいかった。

バッグに必要な書類を詰め、帰る支度をする。

「帰るのか」

進藤が書類を整理しながら、目も向けずに話しかけてきた。

「はい」

「おつかれ」

「お疲れ様です」

バッグを持って席を離れる。

少し歩いてから、進藤の声がした。

「今日こそちゃんと愛ちゃん見とけよ」

進藤の方を見ると、まだ書類整理をしているようだった。

「……見ませんよ」

そう言つと、進藤は少し笑った。

第二章：夢の中 18話

帰り道、空には月が昇っていて星がいくつかが輝いていた。
夜風が冷たい。

人の目を気にして、自分を殺すのは嫌いだ。

でも、やめようとしても体が、顔が、口が勝手に嘘をつく。

ああ、こんな自分は嫌いだ。

そう思っても、自然にもう身についてしまっただけ、こびり付いてしまっただけ、自分ではどうにもできない。

少しづつでも変われたら、自分らしくいられたら、すべてを誰かにわかってもらえたら・・・

そう思う反面、誰にもわからないように装う自分がいて、誰にも入って来られないように、心に鍵をかけている自分がいる。

誰かに何かを理解してもらおうのは、難しい。

だってその人は自分ではないのだから。

育ってきた環境も、人生も、性格も、想いも違う。

だから、何も言いたくない。

わかってもらえなくなっただけいい。

そう言い聞かせていたのに。

夢の中で出会った彼女は何だか違った。
自分のことを自分の口で話して、もしかもしれないけれど理解して
もらえたのは、なんだか心地よかった。
心が軽くなったような気がした。

やっぱり、心のどこかでは誰かに理解してほしいと願っていたのだ
と感じた。

そう考えているうちに、いつの間にかマンションに着いた。

自分の部屋へと向かう。

なんだか最近、考えてばかりのような気がする。
この世界はわからないことが多すぎた。
自分でさえ良くわからない。

でも、少しずつ変わってきていると思う。

自分の部屋のドアに鍵を差す。

少しずつ、少しずつ心を開いて受け止めていくことで、
変われるだ
ろうか。

両親とのことも。

靴を脱ぎ、バッグをソファに放り投げ、サイに餌をやってからシャ
ワーを浴びた。

この後にまた仕事をしなくてはならないのかと思うと、全然気持ち
良くなかったし、疲れも取れなかった。

シャワーから出てスウェットに着替え、棚からカップラーメンを出して蓋を開け、お湯を注ぐ。
なんとなく晩御飯を作る気分じゃなかった。

3分待っている間に、バッグから必要な書類を取り出し、パソコンを立ち上げて仕事の準備をした。

ラーメンを食べながら仕事をし、結局今日の仕事を終えたのは夜の一時すぎだった。

それから歯磨きをして、水を一杯飲んでから部屋の電気を消し、ベッドへと潜り込んだ。

早く寝てしまいたい。

あの夢の中の彼女に、今日あったいろんなことを話したい。

第二章：夢の中 19話

目を瞑り、体の疲れを感じる。
体が重い。

どンドン沈んでいく。

やがて意識も向こうへ引き寄せられていく。

“落ちる”という不思議な感覚。

いつものように気付けばベンチがあって、そこに彼女は座っていた。

でも、いつもと違う。

彼女はベンチの上で膝を抱え、膝に頭をうずめていた。

「くんばんは」

いつものように俺がそう言つと、一瞬肩がびくつと動いて、ゆっくりと頭をあげた。

「くんばんは」

それはいつものような落ち着いた笑顔ではなくて、何処か寂しげな、悲しそうな笑顔だった。

眼は赤くなく、腫れてもいないようだから泣いていたわけではなさそうだった。

ただそれだけで少し安心した。

彼女のとなりに腰を下ろす。

「何かあった？」とか、ここで普通は聞くのだろう。

実際、俺も何があったのかもすごく気になるけれど、言いたくないことや聞かれたくないことは誰にでもある。

自分自身、あれこれ聞いてこられるのは嫌いだ。

だから、こちらからは聞かないでおこう。

そして彼女が話してくれた時は、ちゃんと聞いてあげよう。

それからしばらく何も話さずにただ座っていた。

もともと話すのは得意じゃないから、その静けさは別に苦じゃなかった。

けれど、どこか淋しいのは何故だろう？

話すのは好きじゃないはずなのに、話したいと思うのは何故だろう？

何か話をしてみようか。

でもそれで彼女が、今抱えているものを言うタイミングを逃してしまっただろうしよ。

それ以前に、話す気がないかもしれない。

でもできれば、話してほしい。

知りたい。

聞きたい。

彼女のことを。

何だかだんだん落ち着かなくなってきた。

彼女の方を見ると、彼女はまだ頭をうずめて何か考えているようだった。

もういっそのこと、思い切って聞いてしまおうか？

案外さらっと言ってくれるかもしれない。

でも不快に感じてしまったら？

聞いてほしくなかったら？

そんなことをぐだぐだ考えているうちにも、時間は経っていった。

きつと言いたくないんだろう。

それならそれでいいじゃないか。

なんで知りたがるんだ。

自分らしくない。

目を閉じ、ここに吹くわずかな風を感じる。

第三章：夢で逢えたら 1話

そして、次に目を開けた時は布団の中だった。カーテンの隙間から朝日が差し込んでいる。

自分らしく、か。

今俺が思う「自分」は、本当に「自分」なんだろうか。

子供の頃から自分を偽って、良い子を演じて、そしたらいつの間にか「自分」を見失った。

自分でも良くわからない「自分」しか残っていなかった。

本当の俺はどこにいるんだろうか？

いつもふと考えてしまう、結局答えが出ることはないのに。そんなこと、考えたって無駄なのに。

体を起こし、部屋を見渡す。

サイが机の下でぐっすりと眠っている。

猫は良いな。こんな人間みたいにあれこれ考なくていいんだから。まったく、羨ましい限りだ。

ベッドから降り、洗面所へ向かい顔を洗う。

結局、彼女は話してくれなかった。

彼女と交わしたのは挨拶だけ。

あんなに長い時間そばにいたのに。

横にいて、何もしてあげられなかった。

聞いてほしいなら、彼女は話すだろう。

でも彼女は話さなかった。

何もしてほしくないのなら、放っておいてほしいのなら、そうしてあげるべきだ。

だから、良いんだ。

気にするな。

そう自分に言い聞かせながら、朝食を作る。

作るといっても、ただ食パンにバターとジャムを塗るだけだ。

それをブラックのインスタントコーヒーで胃袋へ流し込む。

朝食を済ませ、寝ているサイの横に餌を置いてから、事務所へ向かう準備を始める。

朝食を済ませ、寝ているサイの横に餌を置いてから、事務所へ向かう準備を始める。

スーツに着替え、歯を磨き、身だしなみを整える。
それから、机の上に無造作に置いてある書類をバッグに入れて部屋
を出る。

外に出ると、空には澄みきった青空が広がっていた。

雲もあまりない。晴天だ。

だけど風が冷たくて寒い。

きっと夜は、今以上に寒くなるだろう。

今日もまた早めに帰ってくるか。

なるべく暖かい日向の所を歩きながら事務所へ向かった。

第三章：夢で逢えたら 2話

事務所に着くと、いつものようにみんなせかせかと働いていた。

何人かの人に挨拶を交わしてから、自分のデスクにつき、仕事に取り掛かる。

仕事をしながら進藤のくだらない話を聞いて、昼はコンビニのパンで済ませ、その後同僚と少し話して、小林沙也ともいくらか話した。

ああ、変わってない。

なんだろう。そう感じる。

変わりつつあったのに。

何故だろう？

なんだか、空しい。

ここ最近、いつもとは違っていて、なんだか楽しかった。
何かが変わっていくのを感じていた。

なのに・・・

ふと思い出されるのは、夢の中の彼女が顔を伏せて小さくなってい

る姿。

ああ、そうか。

彼女が笑ってくれれば、なんだかこっちまで楽しくなった。
彼女が話を聞いてくれるのが嬉しかった。

やっぱり、彼女のことを知りたい。

そう思うのはいけないのだろうか？
迷惑だろうか？

「あー・・・」

イスの背もたれに体を預け、天井を見る。

「どづした？」

となりの進藤が、少し笑いながら聞いてくる。

「いや、別に。ちょっとした考え事です」

慌てて体を起こす。

「へえ、考え事」

「あんまり興味なさそうですね」

「だつてお前、こつちから深く聞いても言わなさそうだし。相談に乗ってほしいです、とか可愛げのあること言われたことないし？ 悪かったなー、相談も持ちかけられない頼りなさそうな先輩で」

なんか、少しふてくされてる・・・？

「じゃ、あの・・・相談に乗ってほしいんですけど」

「“じゃ”ってなんだよ。“じゃ”って」

「いいじゃないですか別に。そんな細かいこと」

「まあいいけど」

良いなら言つなよ、面倒くさい。

「で、相談って？」

「仕事しながらでいいんで」

パソコンの方を目で見せて促す。

「そうか」

二人してパソコンに向き直る。

「あの、例えば、進藤さんがすごく知りたいことを誰か一人が知っていたとして、でもそれをその人に聞くのは迷惑かもしれない。傷つけてしまうかもしれない。でも、それでも知りたいとしたら、どうしますか？」

「そんなの、簡単だ。その人に聞けばいいだろ」

「迷惑かもしれないのに？」

第三章：夢で逢えたら 3話

「でも、自分が知りたいことだろ。答えを知っている人がいるのなら、聞くべきだ。傷つけるかもしれないとしても、本当にわかりたいのなら聞け。相手のために思うことは大切かもしれない。でも、自分の想いを尊重することだって大切だ。だいたい、そんなこと我慢したって、どうしようもないだろ」

そんなこと我慢したってしょうがない。確かにそうだろう。答えは簡単で、こんなこと普通は悩む必要なんてない。

けど、傷つけてしまうんじゃないかって。不安になる。

多分、今までの俺は相手がどう思うかとかよりも、自分が相手にどう思われるかが大事だったんだと思う。本当は、相手なんてどうでもよかつたんじゃないかって。

自分、自分、自分って、自分ばっか大事だったのかもしれない。

本当、嫌になる。

でも、彼女は違う。どうでもよくなんてない。

きつと、今まで出会った人の誰よりも。

夢でしか会えない。

何処に住んでるのかも知らない。

存在してるのかもわからない。

だからこそいろんなことを話せた。

俺が黙って考えてるのを見て、進藤が言った。

「お前さ、あんまり考えないで動いてみたら？」

「・・・何ですか？」

「お前の場合、考えて動いた方が損。選択肢が二つあるのなら、直観的に自分のしたいと思う方を選んだほうがいいぞ。悩めば悩むほどどっちがいいかわからなくなるから」

「でも、悩んでじっくり考えた方が良くないですか？」

そう言うと、進藤はため息を一度ついてから言った。

「ウジウジ悩むより、スパッと決めちまった方が気持ちいいだろ？」

「気持ち良いって・・・」

楽な考え方、最初そう思った。

でも、そんな風を選択できたら良いだろうな、とも思った。

直感的に自分のしたいと思う方、か。

直感で・・・

よし、決めた。

あんなに迷って悩んでたのに、答えはすぐに出た。

それからもしばらく仕事をして、また早めに事務所を出た。

外の風はやっぱり冷たく、とても寒かった。

体を温めるために、いや本音を言っと、早く部屋に戻って仕事を終わらせ、夢に落ちるために帰り道は走って帰った。

早く、会いたい。

マンションについてもエレベーターを使わないで、階段を走って上った。

エレベーターを待っていらなかったからだ。

息が上がる。でもなぜか足は軽い。

第三章：夢で逢えたら 4話

鍵を回し、部屋に入るなり急いでコップに水を汲み、それを一気に飲み干した。

ゆっくりと息を整える。

なんだか笑えてきた。

こんなに息を切らせてまで、誰かに会いたいと思ったのは初めてかもしれない。

なんか変な感じだ。

・・・嬉しい・・・のか？

よくわからない。

ささっと急いでシャワーを浴び、サイに餌をやる。

それからすぐに仕事の続きに取り掛かった。

早く、早く、早く。

心の中でそう何度も呟きながら手を動かす。

それと同時に頭もフル回転していた。

その頭の中で、不安も一緒に激しく動く。

会ってどうしよう。

まずなんて言おう。

その不安を頭の隅に追い払う。
けれどすぐにそれはまた動き出す。

あれこれ考えながらも、ちゃんと手を動かしてはいたのだが、結局
終わったのは2時だった。

彼女はもう向こうにいるのだろうか……。

ふとそんなことを思う。

電気を消し、布団の中へ潜り込む。

ご飯はもう食べる気にならなかった。空腹感はあるが、時間
も時間だし、何よりもう疲れてきってしまった。

体が重い。

動きを止めると、全部の疲れが下に落ちていく感覚がする。

布団はなんだかすごく冷たかった。

そのせいかいつもより落ちるのに時間がかかった。

何もない白い世界は、今日はなんだか寂しそうだ。

なんだろう。自然とそう思った。

いつもと変わらないはずなのに。

しばらく歩いていると、いつの間にかベンチは現れる。

彼女はもうそこにいた。

今日は膝を抱えて縮こまっではいなくて、前みたいに目をつぶっている。

初めてその姿を見た時のように、まるで寝ているように見えた。

それを見ると、なんだかかほっとした。

ここでは足音がたたない。日の光とかもないから影もない。

だからだろうか、俺が近くに行っても彼女は全然気がつかない。

「こんばんは」

俺の挨拶でようやく彼女は気付いたらしく、ゆっくり目を開けてから落ち着いた口調で挨拶を返した。

「こんばんは」

そう言った彼女は笑顔だった。いつもの笑顔。彼女をあまりよく知らない人はそう思ってしまうかもしれない。

でも本当の彼女の笑顔じゃない。
それくらいもうわかる。

第三章・夢で逢えたら 5話

静かに彼女のとなりに座る。

すると彼女は昨日のことがまるで嘘のように、とにかく明るく笑顔で話し始めた。

「あの、この前言ってた本なんですけど、今度映画化するらしいですよ！ 噂でなんですけど、キャストは確か・・・」

彼女の話の半ば無理やり遮る。

「あのさ、聞いてもいい？」

「え？・・・なんですか？」

彼女の目を真っ直ぐに見ながら聞く。

「昨日も今日も、何で落ち込んでるの？」

そう言った後に、「言いたくないなら言わなくてもいいから」と少し慌てて付け加えた。

彼女も俺の目を見る。

しばらく目を合わせてから彼女は下を向いて、また少しして何か吹っ切れたように顔をあげた。

「やっぱり聞かれちゃいましたね。そりゃ、あんなにあからさまに落ち込んでたら聞きますよね」

言いながら彼女はちよっと困ったように笑った。

それを見た俺も、多分少し困ったような顔になっていただろう。

「本当だつたら絶対話さない。誰にも・・・絶対」

自分に言い聞かせるように彼女は呟いた。

「でもここは夢の中だから。現実じゃないから。それに、とっても心地良くてとっても好きな場所で、ここでは嘘とか我慢とかしたくない・・・」

彼女はふう、小さなため息をついてから「だから、だから」と話を続ける。

「・・・だから、聞いてもらいます」

彼女が俺の目をまた見る。今度はさつきより強く、まっすぐに。
一瞬ポカンとしてしまった。「話します」「じゃなくて、「聞いてもらいます」と彼女が言ったからだ。

でもそれがなんとも彼女らしくて、素敵だった。

俺だってこんなよくわからない夢の中じゃなきゃ話してない。あんなガキでバカで、今もまだ引きずっている格好悪い話なんて。

「前に、姉の話をしたじゃないですか。勉強とかはできるけど、泳げなくて料理もできないって」

「うん」

「確かに泳げないし料理もできないけど、それ以前に話せないんですよ。姉は」

話せない？

「それは耳が聞こえないとかで？」

「いいえ、普通に聞こえます。家族とだったら本当に稀ですけど話す時はあるんです。だから、そういうハンディキャップとかでいうわけじゃないんです」

「その、お姉さんはどうして話せなくなったの？」

するとまた彼女は少し困ったような顔になった。

第三章：夢で逢えたら 6話

「わからないんです、話さないから。でも多分・・・イジメ」

「イジメ？」

「多分としか言いようがないんですけどね」

まあそうだろう。こつちが知りたくても、本人が話してくれないんじゃない。

わかって、あげられない。

「姉は頭が良かったから、一人で他県の高校に行っただ。むこの寮に入って、家族とも友達とも別れて・・・たったひとりで」

彼女はうつむいて、握りこぶしを作った。

「姉はもともと無口だし、とつてもとつても強がりでも負けず嫌いだ。だから、夏休みに帰って来た時も私たちになにも言わなかった。だから、気付いてあげられなかった。きつと、きつといっぱい抱え込んでいたのに」

「・・・うん」

「すごく優しくて、面倒見の良いお姉ちゃん、頼れるお姉ちゃん、自慢のお姉ちゃんだった。そんなお姉ちゃんが好きだった」

「うん」

「夏休みが終わって学校に戻った次の日、お姉ちゃんは教室で倒れた。その知らせを聞いてすぐにみんなでむこうの病院に行って、そしたら、そしたらもうお姉ちゃんは話さなくなってた。病院の先生はストレスが原因だろうって。入院してる間、お姉ちゃんの学校の人たちは先生以外誰も見舞いには来なかった」

「うん」

彼女が話してくれるなら、黙って最後まで聞こうと決めていた。けど、彼女が自分に言い聞かせているような言葉に、何か相槌をうたなければ彼女が話を止めてしまいそうな気がして、何度も何度も相槌を打つ。

「高校を退学して、家に戻ってからもずっと何も話そうとはしなかった。どこかに行くでもなく、ただ家に籠って一日一日を過ごしてても時々知らないうちに何か物を壊してたり、部屋で倒れてたりしてる時もあった・・・」

一度言葉を切って、絞り出したように震えた声で彼女は言った。

「・・・わからなくなるんです。全部。お姉ちゃんが悪いわけじゃ

ない。家族のせいでもない。誰のせいかもわからない。誰のせいにもすることができない。お姉ちゃんの人生が、こんなにも変わってしまったのに。それに両親は自分のせいだって自分を責めて。私もなんだか自分のせいのように思えてきて、でもどうしようもなく、本当に、わからなくなるの」

「うん」

家族が自分の知らないうちに傷ついて、ボロボロになってしまうというのは、どんな気持ちなんだろう。

第三章：夢で逢えたら 7話

気付いた時には自分ではもうどうにもできなくて、ただ見てることしかできないというのは、どんな気持ちなんだろう。

話すことをやめてしまったお姉さんを見る彼女は、どんな気持ちなんだろう。

俺にはその気持ちは確かにはわからない。自分の身に降りかかってこない限りは、多分ずっとわからない。

でも、とてもつらく悲しいということは痛いほどわかる。どうしようもなく、もどかしい気持ちもわかる。

でもそれは昨日今日で始まったことじゃないはずだ。

「昨日、姉がいなくなっただんです。母の知らないうちに家を出て、夜になってもずっと帰ってこなくて、もし私のアパートに来たらいけないからって私は探しに行けなかった。母も同じで、父一人で何時間も探しました。結局、夜12時を過ぎてふらっと帰ってきたんですけどね」

先程までの必死に絞り出していたのとは違い、なんだか少し冷静な話し方だった。

「私、死んじゃうんじゃないかなって思ったんです。姉が自殺するんじゃないかって。そう思う自分もすごく嫌で、もし本当に姉が死

んだらうって思うとすぐ怖くて、怖くて怖くてたまらなかった。もし死んでしまうのなら全部話してほしい。いや全部じゃなくても、とにかく前みたいに話してほしい。いっぱい姉に言いたいことはあるのに、何一つ言えない。家族なのに。そんないろんなことを考えてたらいつのまにか眠ってました。でもこっちに来て、どうしても頭から離れなかった」

「昨日はごめんなさい。なんか勝手に思い悩んで、気まずかったですよね」

「え？ あ、いや全然！ そりゃ昨日は驚いたけど、でも話が聞けて良かった」

彼女がいきなりこっちに話を振ってきたため、少し動揺してしまっただ。

「話してくれてありがとう」

自然とその言葉が出た。

彼女は驚いたような、少し複雑な顔をしている。

「でもさ、お姉さんは言わないと思う。俺にはよくわからないけど、例えば普通に話せたとしても君や両親には言わないと思う。家族だからこそ」

言える時が来たら言うのかもれない。しかしそれはずっと先の事であって、お姉さんが変わらない限りは起こり得ない事だろう。

「家族だからこそ、ですか」

「俺は家族がどうこう言える立場じゃないけど、家族だからこそ言えないことはあると思う。大事だからこそ、悲しませたくないからこそ言えないんじゃない？」

第三章・夢で逢えたら 8話

「・・・でも、それでもやっぱ言っただけです。だって、このままにしておくなんて絶対にダメじゃないですか。このままあのうつろな生活を送ってちゃどうなるか・・・」

「俺もそれはダメだと思う。誰かが何かしないと。きっとお姉さん一人じゃ変わらない。誰かが何か変わる方法を教えてあげるか、無理にでも引っ張っていくか」

「・・・私には、できません」

「どうして？」

「わかりません。上手く説明できないけど、何というか 怖いんです」

「怖い？」

「“今更”ですよ。もう何年も前からなのに、今更私に何ができるのか不安でもあります。それに、もし姉に拒絶されたらと思うと・・・怖い」

拒絶。そうか、彼女は家族に、大切な人に無視されて拒絶されるのが怖いのか。

でも、それでも誰かが何かしないとどうにもならないじゃないか。

そう思う。けれど口に出すことはできなかった。

きっと彼女もわかっている。

たとえ怖くても誰かが何かしなければ何も変わらない。

しなくてはいけない。頭ではそうわかっている、どうしてもできない。怖い。

そんないろんな葛藤が彼女の中にはあるのだろう。

「もしダメでも、また挑戦すればいい。何度でも何度でもお姉さんに手を差し伸べればいい。君は家族なんだから、“今更”なんて無いだろ。本当に変えたいのなら何年かかってでもやればいい」

そう言うとき彼女は複雑そうな顔をした。今日は何度この顔を見ただろう。

本当のところ、大丈夫だって言っただけだった。

けれど彼女がお姉さんに拒絶される可能性は十分にある。

それを考えると、とても大丈夫だなんて言えなかった。

しばらくの間沈黙が流れ、何か考えていた彼女が少し恥ずかしそうに口を開いた。

「……考えてみます」

それが彼女が頑張っただけ出した今の答えだった。

まあそう簡単に答えの出せる問題でもないだろう。

やってみるとは言わなかったものの、先程までのように否定はしなかったことに安堵した。

その安堵のせいか、「そう」という生返事をしてしまった。

その後の会話はなかなか弾まなかった。

彼女はまた何か考えているようだったし、俺も彼女のお姉さんのことを考えていた。

何度も挑戦すればいいと言ったけれど、何をどうすればいいのか全然浮かばない。

さっきはとてもない加減なことを言ってしまったのだと思うと、少し後悔した。

第三章：夢で逢えたら 9話

朝。いつものように目が覚め、サイに餌をやってから朝食を取り、身支度をして出所する。

いつもと同じ日常。進藤に興味のない話を聞かされ、小林さんと軽く話して仕事をする。

夢の中の彼女のお姉さんの日常はどうなっているのだろう。

自然と彼女のお姉さんのことばかりが頭に浮かぶ。

事務所に居れば必ず誰かと会話をする。誰かに聞かなければいけない時や何かを頼む時、話せなければ困る。

コミュニケーション、意思の疎通として会話は大事だ。喋れない人でも手話などでそれを補っている。

しかし彼女のお姉さんはそれをやめてしまった。自分が困ることの辛さよりも、人との会話の方が辛いと判断したということだ。

そう思わせるほどの何かが、彼女のお姉さんにはあったのだろう。

その何かを越えるのは容易なことじゃない。一人でできることじゃない。きっと誰かの支えや助けがいる。

そしてそのためには、話すことが必要になる。

問題はどうかやってそこまで気持ちをもっていくかだが

また早く事務所を出た。

真つ直ぐ部屋に戻る。ついてすぐにシャワーを浴び、サイと自分の晩御飯の用意をした。

今日の晩御飯はカレー。そしてこの量だと明日の朝もカレーになる。それでもきつと余るだろうから次の日の夜もまたカレー。

だいたいカレーを作るといつもそうなる。二日目の夜もカレーとなるとさすがに飽きる。けれどまた一ヶ月もすればなぜかふとカレーが食べたくなるのだから不思議だ。

きつと女の人ならば何かアレンジしたりするのだろう。自分でもやってみればいいのだが、なんとなくそれも面倒で、結局いつもカレー漬けになってしまう。

具材を煮込んでいる間に残っている仕事をした。

カレーができた後も食べながら作業し、今日は12時に仕事を終えた。

そして布団にもぐったのはその30分後。

布団はやはりすこし冷たい。目を閉じる。夢の中の彼女のことを想った。

彼女はどつするのだろうか。答えはもう出たのだろうか。

あの時の会話が頭に浮かぶ。

家族なんだから、“今更”なんて無いだろ

彼女にそう言った。それは素直に出た言葉だった。

本当に変えたいのなら何年かかってもやればいい

本当に変えたいのなら、自分でそう言った。

人のこと言えないじゃないか。

何も変えようとはしなかった。それどころか俺は逃げ出した。

第三章：夢で逢えたら 10話

なのに、偉そうに何言ってるんだよ俺。

・・・なんて、バカなんだろう

白い世界はどこか淋しく、どこか温かく見える。何もなく殺風景だけど、とても落ち着く。
世界のすべてが真っ白に、全部なくなってしまうたらこうなるのだろうか？

全部消えればいいのに。

昔、そう願ったことがある。何もかもを捨ててしまいたいと、強く思ったことがある。自分はとても小さく、壁はとてつもなく大きいように見えた。

そしてある日、どうしてわざわざこの壁を越えなければいけないのか、わからなくなった。越える必要なんてない。世界は広く、道は他にもあるのだと、壁から目をそらして去った。

彼女はいつもとなんら変わりはなかった。挨拶をしてから隣に座る。一息をついて口を開く。

「昨日は「めん」」

「え？」

「なんか無責任なこと言ったなって。ほら俺も家族のこととか全然ダメなのに、わかったようなこと言って。でも、昨日言ったことは正直に思ったことだから。今思うと考えが甘いというか、ちょっと考えなしだったけど、でもあながち間違っていないんじゃないかって思う……」

真面目に言ったつもりなのに、くすくすと彼女は笑った。

「私、頑張ってみようと思うんです。最初はダメでも、何度もアタックしてみれば変わるかもしれない。やってみる価値はある。確かにもっと考えなくちゃいけないことですけど、でも昨日の言われたことでやっと向き合おうって思えたんです。だから、謝らないで下さい。……それに、私もあながち間違ってたと思いますよ」

昨日の張り詰めたような表情とは全く違う、素敵な笑顔だった。

「ただ、どうすればいいのかが全然わからないんです」

「俺も考えてみたけど、ダメだった」

「まあ、家族に今更なんてないらしいですから、ゆっくり考えても

大丈夫ですよね？」

「・・・それ言われるとちょっとキツイ」

「そうですか？」

そう言っただけでまた彼女はくすくすと笑う。

いつものように会話が弾む。

彼女のお姉さんのことを二人で考え、話しあった。他にもくだらない話もしたし、彼女は前よりもっとたくさんのお話を話してくれた。お姉さんのことがあって話すのを控えていたのだろう。話は、家族のことが多かった。

第三章：夢で逢えたら 11話

彼女はとても懐かしそうに話す。

本当に家族が好きなんだというのがよくわかる。

自分とはあまりに違う家族への想いがなんとなく不思議で、楽しそうに話す彼女が羨ましくも思えた。

彼女の父は変な冗談を言うのが好きで、よくからかわれていたんだと彼女は言った。スポーツを見るのが好きで、テレビと会話していることもままあったんだとか。けれど怒る時はとても怖く、彼女も小さい時は拳骨を頭にもらったらしい。

母親の方はというと、優しいがどこか抜けててちょっと危なっかしい人、と一言で彼女はまとめてしまった。

彼女はたくさんさんの思い出を一つ一つ確認するように話し、楽しかった過去に想いを馳せた。

毎年家族でキャンプに行くようなそれなりに仲の良い家族。どこにもあるようなごく普通の家族であり、きっとこれからもそうなんだと何の疑いもなく彼女は思っていた。

しかしそんな家族の間に亀裂が走る。

それは家族にとってはあまりに唐突で、どうすればいいのかわからなかった。ただじわじわと悲しみと虚しさが押し寄せてくるのを感じていた。

家族は家族に気を遣い、戸惑い、打ちひしがれ、どんどん修復がきかなくなっていく。

彼女は家にいるのも苦しくなった。

どうして家族にこんな風に接しなければならぬのか。

どうしてこんな思いをしなくてはいけないのか。

私たちが何をしたというのか。

どうして壊れてしまったのか、原因は？

誰にも聞くことはできない。全部自分の胸の中に押し込め、蓋をする。何事もないかのように振る舞い、偽った。

一人暮らしを始めても家族の問題はつづく。いつ終わりが来るのかもわからない。自分ではどうすればいいかわからない。それ以前に、自分一人でやれる自信もない。

誰か、誰か、誰か、

誰か、助けて。

怖い。辛い。どうすればいいのかわからない。お願い、そばにいてだけでもいいから。

助けて。

やり場のない思い。それはやはり誰にも言えなかった。ずっと、言っただけいけないような、そんな気がしていたんだと彼女は話した。

「それがまさか、会って数日の人に話しちゃうなんて……。でもなんか、言っても良いような気がしたんですよ。いつもはダメだっと思ってのに……。本当に、不思議」

「それ、わかる。何なんだろうね、ここって」

白い世界に大きな桜の木が一本とベンチが一台。

第三章：夢で逢えたら 12話

弱く、しかし気持ちの良い風。あまりに閑散としているが、とても落ち着く場所。

夢の中ではあるけれど、あきらかに普通の夢とは違う、なにか変な力がある。それが一体何からくるものなのか、何のための力なのか、見つける術はいまだない。こうやって考えているうちにも、だんだんどうでも良いように思えてくる。それもまたこの力なのだろうか？

誰にも言えなかったことを打ち明けたためか、彼女との距離が近くなったような気がする。お互いにお互いの悩みを抱え、その悩みを真剣に話し合う、ただそれだけなのになんだかとても心地良い。きっと普通は当たり前前にできてしまうのかもしれない。けれど俺にとっては初めてのことで、なんだか嬉しく思えた。

仕事も確かに少しの疲れはあるが、前のような虚しさやひどい疲労もなくなった。あの進藤にも「なんかお前、余裕そうだな」と言われたほどだ。

「じゃあちよつと前まではどんな感じでした？」興味本位でそんなことを聞いてみた。

「いっぱいいっぱいだったな」

まさにその通りだと思った。余裕なんて何処にもなくて、ただ周りにそう装っていただけで、本当は苦しかった。こんなに仕事をしていたもやりがいは感じなかったし、何の楽しみや進展もなく、ただ忙しいだけですごく退屈な毎日だった。

しかし今はどうだろう。ほんの少しではあるけれど心に余裕ができたと自分でも思う。外では自然といつも気が張っていたのに、それもだいぶなくなったようだ。同僚との会話も前より楽しくなってきた。たまにはあるが一緒に飲みに行くようにもなった。酒が入るとも

つと気楽に話げできた。どうして今まで距離を置いて、こつやつて話すのを避けていたのだろつかと今となつては疑問に思つ。他にも自分で勝手に壁を作つてしまつていたり、勝手に抱え込んでいた重荷があるのかもしれない。自分が思つてゐるより簡単で面白いことがたくさんあるのかもしれない。

日を追つごとに微妙に見かたや考え方が変わつてきた。それは進藤に言われるだけでなく自分でもわかるほどに。

自分のことを考えるのは嫌いだった。しかし自然に考えてしまうのは自分のことばかりで、考えてまた自分にあきれ、嫌いになる。そんなことの繰り返しだった。でも最近は違つ。前ほど自分が嫌じやない。まだ全然バカで情けなくなるけど、それも少しずつ受け入れられるよつになつてきた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2725f/>

夢、つなく想い

2010年10月28日08時24分発行